

⑨ 日本国特許庁(JP)

⑩ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A) 平2-216279

⑬ Int. Cl.<sup>3</sup>

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 平成2年(1990)8月29日

D 06 M 15/53

8521-4L

D 01 F 11/08

6791-4L

D 06 M 11/36

8521-4L

13/00

8521-4L

15/643

// D 06 M 101:36

審査請求 未請求 請求項の数 1 (全6頁)

⑮ 発明の名称 表面変性全芳香族ポリアミド繊維

⑯ 特 願 昭63-259516

⑰ 出 願 昭63(1988)10月17日

⑱ 発 明 者 牧 野 昭 二 大阪府茨木市耳原3丁目4番1号 帝人株式会社繊維加工  
研究所内

⑲ 出 願 人 帝 人 株 式 会 社 大阪府大阪市東区南本町1丁目11番地

⑳ 代 理 人 弁 理 士 前 田 純 博

明 細 書

1. 発明の名称

表面変性全芳香族ポリアミド繊維

2. 特許請求の範囲

繊維表面に固体状のカチオン変換性及び非イオン吸着性の無機化合物が固着されてなる全芳香族ポリアミド繊維の表面に15℃以上の温度で液状を示す分子量10000以上のポリオキシアルキレン含有のポリエーテル系化合物からなる被膜を有し、該被膜の上に該ポリエーテル系化合物と非相溶でかつ分子量が900以下の脂肪族系潤滑剤及び／又はシリコン系潤滑剤の層を有することを特徴する表面変性全芳香族ポリアミド繊維。

3. 発明の詳細な説明

<産業上の利用分野>

本発明は表面強度の改良された全芳香族ポリアミド繊維に関する。更に詳しくは繊維束を捻り合せて用いるコードやロープ等の用途において、その耐摩耗性に優れ、かつ断糸強力保持率の優れた

全芳香族ポリアミド繊維を提供するものである。

<従来技術>

近年、全芳香族ポリアミド繊維は有機繊維の中にあつて、特に、高強力、高モジュラス、高耐熱性、高耐薬品性などといった優れた特性を生かして諸分野での新しい用途に実用化がなされてきている。

しかしながら、かかる繊維は分子の配向や結晶性が高いが為に繊維軸方向には、その力学特性は卓越した性能を発揮するものであるが、その反面、繊維軸と直角方向においては意外にもろいという事実も明らかとなっている。

特に繊維同士の摩擦や他の物体との摩擦により、容易にフィブリル化が生じ、繊維が摩耗しやすく、従つて断糸のような工程を経ると隣位にあった強力が大きく低下し、所謂、強力保持率が低いという欠点を示す。

これらの問題を解決する為に断糸方法や断糸条件などの物理的な方法で改善しようという試みがなされているが繊維の表面特性との関係について

提案されているものは、未だ充分なものがないのが現状である。

これ迄なされている繊維の表面特性の改良による方法としては例えば固体状のワックス成分を繊維表面に付与させたり、或いはフッ素樹脂などの樹脂で繊維表面をコーティングしたりして繊維表面を保護する方法が用いられているが、これらの方法によれば、後加工工程において固着固体成分が脱落して糸導に堆積するためにこれに因る各種のトラブルが生じたり、又一方樹脂のコーティングによる方法では、その処理速度が限定されて、商業生産上好ましくないばかりでなく、繊維が束束された形で樹脂被覆されるため単繊維同士の動きが束縛されてヤーン全体としては固くなり、従って強力保持率の向上が図られないという欠点を有している。

#### < 発明の目的 >

本発明は従来のアラミド繊維の優れた特性をそのまま維持しながら、繊維の表面の性質を大きく改良する方法について鋭意研究した結果、ある特

ポリアミド繊維」である。

ここにカチオン交換性及び非イオン吸着性の無機化合物とはカチオンとの交換能を有し、更に非イオンの吸着能を有する化合物であり、具体的にはシリカ・アルミナ、シリカ・マグネシア、ペントナイト、カオリン、フーラーズアース、酸性白土、活性白土、モンモリロナイト、バイトサイト、タルクなどであり、これらのカチオン交換性及び非イオン吸着性無機化合物は固体状で繊維表面に固着される。該化合物（粒子）の大きさは大体

0.01 ~ 5 $\mu$ 程度のものが用いられる。本発明における固着とは激しい状態での水洗処理や溶剤に浸漬する程度ではまったく脱離しないことをいう。

繊維表面に該無機化合物粒子を固着させるには、たとえば繊維表面が軟化した状態で該無機化合物粒子を繊維表面に押し付けて繊維表面に喰い込ませたのち繊維を固化させることにより行うことができる。すなわち紡出直後の全芳香族ポリアミド繊維にカチオン交換性及び非イオン吸着性無機化合物を吹き付けるかあるいは水にカチオン交換性

定の化合物で繊維の表面を変性させることによって繊維間の耐摩耗強度を従来になく著しく高めることができるという重大な事実を発見し、本発明に到ったものである。

即ち、本発明の目的はコードやロープ等のように堅系加工を施して用いるような用途において、耐摩耗性に極めて優れた表面を有する繊維を提供し、従って堅系後における強力保持率の高い表面変性全芳香族ポリアミド繊維を提供せんとするものである。

#### < 発明の構成 >

即ち、本発明は

「繊維表面に固体状のカチオン交換性及び非イオン吸着性の無機化合物が固着されてなる全芳香族ポリアミド繊維の表面に、15℃以上の温度で液状を示す分子量 10000以上のポリオキシアルキレン含有のポリエーテル系化合物からなる被膜を有し、該被膜の上に該ポリエーテル系化合物と非相溶で且つ水不溶性の分子量が 900以下の脂肪族系脂肪族を有することを特徴とする表面変性全芳香族

及び非イオン吸着性無機化合物粒子を懸濁させた懸濁液中に全芳香族ポリアミド繊維を浸漬せしめて繊維表面に無機化合物粒子を付着させ、ついで全芳香族ポリアミド繊維の2次転移点以上の温度で熱延伸するか熱処理を施すなどの方法を用いる。

全芳香族ポリアミド繊維とは、例えば所定の芳香族ジカルボン酸と芳香族のジアミンとから構成されるパラフェニレンテレフタルアミド或いはその共重合体からなるものなどであるが、特に限定されない。

ポリオキシアルキレン含有のポリエーテル系化合物とはポリエチレングリコール、ポリプロピレングリコール、ポリテトラメチレングリコール等のポリアルキレングリコール類の一種又はそれらの共重合体をいう。ここに好ましく用いられるものはブタノール、エチレングリコール等の低級アルコールを出発物質としてこれにプロピレングリコールとエチレングリコールとを任意のモル比で共重合して高分子屈化したものである。

ここには特に、その分子量が 10000以上で、且

つ15℃以上の温度で液状のものをいう。

この分子量が10000を超えないものではここに目的とする摩擦面の耐摩耗強度の高いものが得られず、又、15℃以上の温度で液状でないと摩擦上への付与に際して取扱いがむづかしいばかりでなく、摩擦の後加工の際にいわゆるスカムと呼ばれる固形物による系等への堆積汚れの原因となり好ましくない。

かかる高分子量エステル化合物はその分子構造から高粘性でありその液膜の強度が高く、極圧下での潤滑性を高める。従って系等の作用により摩擦間に高接圧がかかっても摩擦間の自由度がある。即ち摩擦間摩損力を低減し、摩擦面の耐摩耗強度を高めて系による強力低下を抑える。

しかし、この反面、粘度が高いためにこの生成膜を有する摩擦は、系ガイド頭上を走行する場合には走行摩擦が高くなり、単系が系ガイド頭にとられて毛羽が発生したり、粘性スカムとしてのガイド汚れが発生するなどの弊トラブルが生じるので単独では全く用いることはできない。従

って、本発明の適合低摩係潤滑剤の併用が必要である。

二種の化合物を併用するとそれらが互いに相和性がない場合は別として通常、相溶し合って、せっかく、低摩係系の潤滑剤を用いてもその効果が発現されない。従って本発明で適用される潤滑剤としてはポリオキシアルキレン含有のポリエーテル系化合物と非相溶性であることが必要である。

更に本発明の適合、あらかじめ摩擦面がカチオン交換性及び非イオン吸着性に変性されているので、前記の高分子量ポリオキシアルキレン含有の脂肪族ポリエステル系化合物は優先的に摩擦面に吸着され、従って低摩係系潤滑剤はその液膜の上に形成され、その走行摩擦低減の目的が達成されることになる。

このように、高分子量ポリオキシアルキレン含有のポリエーテル系化合物からなる極圧潤滑剤とこれに対して低摩係系の潤滑剤とが摩擦上で二重構造をとることが本発明の重要ポイントである。

本発明に用いられるポリオキシアルキレン含有

のポリエーテル系化合物と非相溶の潤滑剤は分子量が900以下の脂肪族系潤滑剤及び／又はシリコン系潤滑剤である。

脂肪族系潤滑剤としては、鉱物油、アルコールと塩基酸とのエステル類、或いは天然の油類などをいうが低摩係系潤滑剤として好ましく用いられるにはオクチルバルミテート、オレイルオレート、イソステアシルオレート等の一価のアルコールと一塩基酸とのエステルである。

この適合分子量が900を超えると粘度も高く、従って低摩係系潤滑剤として用いることはできない。

又、脂肪族系以外の例えば芳香族を有する化合物の場合も粘度が高いため、これらも用いることはできない。脂肪族系以外の潤滑剤ではジメチルシリコンに代替されるシリコン系潤滑剤を用いることができる。中でもその粘度が300cst(30℃で)以下の低粘度のジメチルシリコンが低摩係性に対して好ましい。高分子量のポリオキシアルキレン含有のポリエーテル系化合物(A)と分

子量が900以下の脂肪族系潤滑剤(B)及び／又はシリコン系潤滑剤の摩擦上への処理は、前記した如く、あらかじめ摩擦上にカチオン交換性及び非イオン吸着性の基団化合物を固着させた後、まず化合物(A)を付与処理し、該摩擦面に該化合物の液膜を形成せしめ、その後、その上から潤滑剤(B)を付与処理せしめてもよいが化合物(A)と潤滑剤(B)とを同時に付与処理してもよい。同時付与しても前述の理由から化合物(A)は摩擦面に吸着され、結果としては二回に分けて付与処理したと同様の効果が得られる。

又、これらの付与処理に際してはかかる剤を水に含有させた水系の摩擦用処置液として用いてもよく、或いは、実質的に水を含まない溶媒に剤を含有させた非水系摩擦処置液として処理してもよく又、更に付与処理する手段としてはオイリングローラーや計量オイリングノズル、スプレーなど公知の手段のいずれを用いてもよい。

又、処置液としては本発明の化合物(A)および潤滑剤(B)の他に制腐剤など必要に応じて適

の化合物を凹縫用処理剤に混合して用いてもよい。

凹縫用処理剤としての付与量は凹縫重量に対して 0.1~5重量%が好ましい。付与量は化合物(A)、凹縫剤(B)の各々が凹縫重量に対して 0.1~2重量%程度の範囲が好ましい。

#### <発明の効果>

本発明は、凹縫の加工工程で糸切ガイド上を走行する際、その走行凹縫を深めることなく、従って走行時の毛羽、糸切れを起すことなく、又、全芳香族ポリアミド凹縫の本質有する高強度、高モジュラスといった優れた特性を生かしたまま表面の耐摩耗強度の高い全芳香族ポリアミド凹縫を提供するものである。

#### <実施例>

以下に実施例によって本発明を具体的に説明する。

尚、本発明において評価に用いた特性値は次の方法に従って測定した。

#### (1) 凹縫表面の耐摩耗強度

図-1に示すように1500デニール1000フィラメ

ントの凹縫Yの両端を一定回転(500rpm)で回転する円板1、2に取り付け、その凹縫を滑車3、4を通してA点にて凹縫が2ターンとなるように張をかけて交差させ500gの荷重6を掛けた滑車5に掛ける。

尚A点での凹縫の交差角は40°とし又凹縫の総返し往復ストローク長は50cmとした。

このように凹縫と凹縫とを繰返し摩擦させて磨耗切筋までの時間を秒表で表わし、耐摩耗強さとして評価した。

#### (2) 走行凹縫係数

図2に示すように原糸パッケージ1から解舒された凹縫Yは糸切ガイド2を経て更にS状の張力コンペンセーター3で張力 $T_1$ を20gに調整し、表面粗度11Sの60φの円筒状摩擦体4を接触角180°で接しその出側張力( $T_2$ )を測定後、表面速度300m/minの回転ローラー5を介して糸束を走行せしめた。このときの凹縫係数を $\mu = (1/\pi) \ln(T_2/T_1)$ で算出した。

#### (3) 凹縫強度保持率

(1) インストロン引張試験機を用い初長25cmの凹縫サンプルを20℃、65%RHの雰囲気下で引張速度10cm/分の条件で引張り切断強度を測定して、これより凹縫の強度(g/de)を求めた。

(2) インストロン引張試験機を用い10cm当り40ターンの下屈及び上屈をかけた二本凹縫コードを(1)と同様の測定条件で測定しコードの強度(g/de)を求めた。

これらのコードの強度の凹縫の強度に対する比から強度保持率を求めた。

#### (4) 総合判定

以上の測定法により評価した結果を総合評価し良~不良をO~Xで示した。

#### 実施例1~3、比較例1~6

テレフタル酸クロライドとパラフェニレンジアミン及び3,4'-ジアミノジフェニルエーテルからなる全芳香族ポリアミドを紡出し、水洗を繰返し、ついで水洗後にベントナイト水分散液

を付着せしめて500℃で熱延伸し非吸着性のベントナイト0.42%を凹縫表面に有するカチオン交換性及び非イオン吸着性の全芳香族ポリアミド凹縫(1500デニール1000フィラメント)を得た。

この全芳香族ポリアミド凹縫の延伸の直後に図1に示す組成からなる15%の水系エマルジョンを付着剤として固形分量が凹縫重量に対して3.5%となるように付与し、乾燥して捲取った。

得られた凹縫を前記の評価方法により、評価した結果を図2に示した。

表 1

				実 施 例			比 較 例				
				1	2	3	1	2	3	4	5
ポリ リ分 エチ ー テル	(出発物質)	(PO/EOモル比)	(分子価)								
	グリセリン	35/65	30000	10	10				65	10	10
	ブタノール	65/35	20000			10					
	"	35/65	5000				10				
オクチルパルミテート (MW 358)				50	60	60	60	65			
トリメチロールプロパントリオレート (MW 926)										60	
POE (2) ビスフェノールAジラウレート (MW 680)											60
POE (n) 硬化ヒマシ油				22	25	25	25	25	30	25	20
POE (n) ラウリルエーテル				3				10			5
ジオクチルスルホサクシネートNa				5	5	5	5	5	5	5	5
40cst (於30℃) ジメチルシリコーン				10							

註) PO:プロピレンオキシド  
POE:ポリオキシエチレン  
cst:センチストークス

EO:エチレンオキシド  
(2):オキシエチレンのモル数2

MW:分子価  
Na:ナトリウム

表 2

	実 施 例			比 較 例					
	1	2	3	1	2	3	4	5	6
磁軸表面の耐摩耗強度 (秒)	210	210	190	60	15	180	170	150	4
走行摩耗係数	0.28	0.30	0.32	0.29	0.28	0.41	0.40	0.44	0.28
強力保持率 (%)	72	72	71	52	50	67	69	59	51
総合評価	○	○	○	×	×	×	×	×	×

表2のうち比較例6は全芳香族ポリアミド繊維としてカチオン交換性及び非イオン吸着性無機化合物が付与されていない繊維について実施例1の組成の油剤を付与して同様に比較評価した結果を示した。

これらの結果より本発明が著しい効果を示すことが明らかである。

#### 4. 図面の簡単な説明

図1は繊維表面の耐摩耗強度測定装置の概略図である。1、2は円板、3、4、5は滑車、6は荷重、Aは繊維の交叉点、Yは繊維である。

図2は繊維の走行摩擦係数測定装置の概略図である。1はバクケーフ、2は糸導ガイド、3は張力コンペンセーター、4は円筒状摩擦体、5は回転ローラー、 $T_1$ 、 $T_2$ は張力測定器である。

特許出願人 帝人株式会社  
代理人 弁理士 前田純博

図1

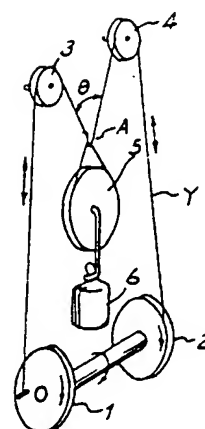


図2

